

宿命、あるムーブメント

源川まり子

喧騒のなか

丘の上の小学校は統合が決まったという

水滴は屈曲したガラスの側面に道をつくり

そうして生まれた境界を一途にみつめながら

時間をかけてストローを噛み潰す

ついでのように臍のあたりに力を入れると

しなだれた腹の下でなけなしの筋肉が硬直するが

なにか密やかで動的なもの

無意識のうちに空白になる器のような

進行形の圧迫感が喉元をおそう

本来であれば

手をじかに握りながら

伝達すべき祝福を

与えることができない

それは誰が決めたわけでもないが

何度考えてもやはり交点は暗闇であって

周回する世界の端は虫眼鏡をのぞくように

こちらの擦り傷をうつしながら

やがて目の前を曇らせていく

すべてに対して凡庸な語りかけ

今日も

裸足になって

水に飛び込むんだそうだ